

デーヴェンドラブッディによる 悲愍増長の論証（上）

岩 田 孝
（早 稲 田 大 学）

法称（7世紀中葉）の主著である『知識論評釈』（Pramāṇavārttika=PV）の第二章（PV II）における主たる論題は、世尊の認識根拠（pramāṇa, 量）たることの証明に存する。即ち、認識根拠は、欺誤のない（avisamvādin）知であり、未知の事柄を顕示するもの（ajñātārthaprakāśa）である。その如く、世尊も、説示した四諦に関して欺誤なく、これまで他者に未知であった四諦を教示する方である、⁽¹⁾ ということを証明する点にある。この証明では、悲愍（karuṇā）の故にこそ、世尊は四諦を教示して解脱道を示し有情を救済する、と論じる。従って、世尊が認識根拠たることを能証する根拠は、有情の苦からの遠離を願う悲愍に存する。⁽²⁾

悲愍により有情を救済するためには、悲愍を連続的に実践する必要がある。悲愍の実践に際しては、そのためのその都度の努力が必要となろう。しかし、もしそうであれば、努力を厭うや否や、悲愍の思いが断じられることになるのではないか。或いは、自己への貪りなどの煩悩のために、悲愍が退転するのではないか。こうした悲愍の実践可能性に対する疑問が生じるであろう。これに答えるためには、悲愍の連続的作用が如何に可能となるのかを証明しなければならない。本論では、悲愍的作用に関する若干の問題点を取り上げて考察したい。

I 悲愍の修習とその結果についての基本的見解

悲愍は修習によって生じ作用する、と法称は PV II 34a'b' において説くが、後の PV II 120 以降の論述によつて、それは、単に悲愍が作用することではなく、悲愍が修習により心の本性、人の本性になることを含意している。そのことは、デーヴェンドラブッディ (Devendrabuddhi, 以下 Dev と略記) による PV II 34 への注釈において、既に述べられている。

悪趣などに墮するという障害がないと、その場合には、悲愍は、修習された後、〔更に〕その様に次々に修習されて〔人の〕本性となる (*sātmibhūta), かくの如き (悲愍) は、〔増長の⁽³⁾〕究極に到達し (mthar phyin pa), 退滅しない (ldog pa med pa) であろう。⁽⁴⁾ [1] 輪廻での過去の多くの生存において悲愍が繰り返し行じられると、「〔その悲愍は、人の〕死後も、〔その〕以前に修習された力により、〔悲愍の〕作用への願いとその意向を伴うであろう⁽⁵⁾」。そうした悲愍は、今生にて修習の後、心の本性となり、増長の極みに到達して、退転することがない、というのである。

ここには、法称が後の PV II 120 以降において展開するであろう、悲愍の作用に関する二つの論点⁽⁶⁾が、既に示唆されている。第一は、悲愍が、修習により、増長の究極に達すること、第二は、悲愍の作用は、特別な障害の無い限り、退滅しないことである。究極到達は、悲愍が一定の程度に制限された (vyavasthita) 増長を有するのではなく、最終に至るまで増長することを示唆する。悲愍の退滅の否定については、法称自身が既に PV の第一章 (PV I) にて論じた、と Dev は見なし、それを説明するために、PV の第一章の第221偈の前半を引用する。この偈文を参考にすると、悲愍が退滅しないとは、次の意味である。煩惱に対しては、それを拒斥する

ことが可能であるが、悲愍については、それが修習により任運に作用する (svarasavāhin) 限り、それを拒斥 (bādhā) できない、という意味である。Dev が第二章 (PV II 34) の注釈において、悲愍の拒斥不可能性の典拠とした PV の第一章の偈文 (PV I 221) は、そのまま第二章に PV II 210 として組み込まれている。この様に法称が兩章にて悲愍の拒斥不可能性を論じたことは、悲愍が何故に拒斥されないのかという問題が重要であったことを示している。

以上、Dev は、法称の悲愍修習説に対する注釈の冒頭において、悲愍が人の本性となることを説き、それを説明する二つの側面、即ち、悲愍の究極的増長と拒斥不可能性を明示した。これらは、悲愍が連続的に作用するために不可欠な条件である。本論では、究極的増長の側面から、悲愍の実践可能性の根拠について考察を進めたい。

仏教論理学派での悲愍の増長説に関して基本となるのは、法称の見解である。これは既に考察されているので、法称の主要な論説のみを要約しておこう。⁽⁷⁾

悲愍は、心の特性 (guṇa) である (PV II 125ab)。その悲愍は、修習により生じる (abhyāsaja) と、任運に作用する (pravartante svarasena) (PV II 124)。それ故に、人々に生じた心の特性としての悲愍は、心の自性 (svabhāva) となる。悲愍は、この様に任運に作用するが、先行した修習より後のそれぞれの努力 (yatna) は、悲愍に対して、次々に一層勝れた特殊状態を与える (viśeṣasya vidhāyakaḥ) (PV II 125)。

悲愍は、先行する同類の種子から生じて増長する (tulyajātiyapūrvabijapraṇīddhi)。つまり、それぞれ先行する時点の悲愍が原因となり、それから、その次の時点の悲愍が順次生じ、それが連続することにより、悲愍が増長する。そうした悲愍は、順次に修習されると、住止すること (sthiti)

はない (PV II 126)。

自らの種子から生じた悲愍は、心の究極的な本性となる (prayāty atyantāsātmatām) (PV II 129)。悲愍をそれぞれ先行する時点で修習すること (abhyāsaḥ pūrvāḥ pūrvāḥ) は、それぞれ後続する時点の悲愍が強く鮮明であること (pāṭava) を可能にする要因だからである (PV II 130)。

II 悲愍の増長の論拠

上述の法称の悲愍修習説においては、悲愍の修習を重ねて行くと、悲愍は、順次に高まって、心の本性、つまり、任運に作用する本性になることが示されている。しかし、これらは、論理的な論拠とその帰結という形で表現されていないので、何を論拠にして、どのような結論を導いたのかについては、明快ではない部分が残されている。一方、Dev の注釈 PVP では、主要な論述が論証式の形で表現されているので、何を結論とするのかを読み取ることが可能である。以下では、PVP を基本にして、悲愍の増長の論証を検討しよう。

II.1 悲愍は、修習にて特殊となる心の特性である故に、人の本性となる (ad PV II 120-121, see PV II 125ab, 129)。

上述の Dev の言説 ([1]) によると、PVP では、悲愍が人の本性であることから、悲愍の究極到達と不退滅が説かれている。この「悲愍が人の本性であること」は如何に証明されるのか。この証明のために、Dev は、「心の特性」(manoguṇa) を論証因として用いて、二つの論証式を構成する。悲愍や捨 (upekṣā) などの心的作用は、心の特性であり、それは優れた在り方としての特殊性 (viśeṣa) である。およそ特殊性としての特性は、

順次修習されると人の本性になる。これが論証の骨子である。二論証式の第一の論証において、論拠として「心の特性」を用いるが⁽⁸⁾、その論拠が一般的であると懸念したためであろう、第二の論証では、「修習により特殊となる」という限定を「心の特性」に付して、これを論証因として、悲愍が人の本性となることを以下の如く証明している。

修習によって特殊となる (goms pa las khyad par du 'gyur ba) 心の特性 (manoguṇa) は、順次に十全に修習されると、人の本性となる (*sātmibhavanti)。例えば、〔カーパーリカの道に入った〕そのバラモン (śrotriya) の場合のカーパーリカ (kāpālika) の残酷さ (*nairghr-nya) 〔は、心の特性であり、以前からの習慣により生じてその者の本性となる〕如し。そして、人々の大悲愍は、修習により特殊となる〔心の特性である、それ故に、十全修習にて人の本性となる〕。こうした〔論証での「修習にて特殊となる心の特性たること」なる論証因〕は自性論証因である⁽⁹⁾。 [2]

この論証式を以下の如く略記する。なお、A: (X → Y) なる略式で、A は証明されるべき主題を示し、(X → Y) は、論証因である X が所証特性である Y に包摂される論理的関係を示し、コロンは、その包摂関係が主題に適用されることを示す。

大悲愍: (修習にて特殊となる心の特性たること → 十全修習にて人の本性となること) [2a]

悲愍が心の特性であることから、悲愍は修習により人の本性となる、という帰結を導く第一の論証でも、「心の特性であるものは、修習により人の本性となる」という包摂関係を例示する実例として、バラモンから転向した、髑髏を抱く苦行者カーパーリカの残酷さが用いられている。他者にも認められるこの実例は次の如く解される。カーパーリカのバラモンであっ

たときの残酷さは、習性化してその者の本性となり除滅され⁽¹⁰⁾ない、その如く、心の特性は、繰り返し実践されると人の本性となる、即ち、任運に作用⁽¹¹⁾し、特別な努力なしには除滅され得ない様な本性となる⁽¹²⁾、と解される。

Dev は、論証 ([2a]) において、「修習にて特殊となる」という限定の付いた「心の特性たること」という論証因は、確実に「人の本性となる」という帰結を導く、と論じるのであるが、その論証因が妥当であることを示すには、「修習にて特殊となること」とは何を具体的に意味するのかわを示さねばならない。それは、次に示す反論への批判を介して間接的に知られ得る。

II.2 悲愍は、安定した拠り所を有し、しかも、更なる努力に依存しない、心の特性であるので、究極的究竟に到達する (ad PV II 124-125)。

論証 ([2a]) によると、悲愍は、心の特殊な特性であるから、修習により人の本性となる。また、上述の言説 ([1]) によると、修習にて本性となる悲愍は、増長の究極に達する。この両説の連立により、PVP では、次の説が自説となる。悲愍は心の特性であり、その悲愍は、修習にて特殊な状態となると、人の本性となり、そのことから増長の極みに至る、という説である。これに対して、反論が予想される。或るものに修習による特殊性があるとしても、その特殊性には程度の制限された増長のみが認められる。例えば、跳躍は身体に属する特殊性であるが、その跳躍は、無限に増進するわけではない。この様に、或るものに修習による特殊性があるとしても、その特殊性の制限なき増長は必ずしも成立しない。従って、「悲愍は、修習にて特殊となる心の特性であるから」という論証因は、必ずしも「悲愍は、修習により人の本性となり増長の極みに至る」という所証を導かない、つまり、不定 (anaikāntika) 論証因となる、という反論であ

る。

PVP を始めとする諸注釈は、この反論を論破するために、「悲愍が心の特性である」という論証因に限定条件を付している。跳躍は更なる努力に依存する。その結果、跳躍の増進は制限される。悲愍は、究極的に増長するためには、跳躍の様に更なる努力に依存するものであってはならない。また、水は、沸騰すると蒸発して消失するので、沸騰なる特性のための安定した抛り所にはならない。沸騰は、加熱という更なる努力に依存し、安定した抛り所を有しない。その結果、沸騰には究極的増長が成立しない。悲愍は、究極的に増長するためには、沸騰の様に安定した抛り所を欠いたものであってはならない。Dev は、これらを考慮に入れて、「心の特性」という論証因に、「安定した抛り所の有」と「更なる努力への非依存」という条件を付して、次の論証式を構成する。

およそ安定した抛り所を有した (sthiraśraya) 特性 (dharma) で、しかも、その様に生じていて、更なる努力に依存しない (*punaryat-nānapekṣin) [特性]、それは、修習により究極的究竟 (śin tu mthar thug pa) に到達する。例えば、[火による] 燃焼作用によって木などに生じた物質 (rūpa) など〔は、木などを抛り所とし、ひとたび焼かれると、燃焼のための外的な原因に依存しない、しかも、一層進んだ燃焼状態に至り、やがて灰などの最終的状态に至る〕如くである。そして、人々の大悲愍は、十全に修習されると、安定した抛り所を有し、特殊性として生じて、更なる努力に依存せず存する。〔それ故に、大悲愍は、修習により究極的究竟に到達する。〕こうした〔論証での論証因⁽¹³⁾〕は自性論証因である。 [3]

ここでは、「安定した抛り所のある、更なる努力に依存しない特性たること」が論証因で、それにより、「修習にて究極的究竟到達」なる所証が導

かれている。

大悲愍：(安定した拠り所を有する、更なる努力に依存しない特性たること
→ 修習により究極的究竟に到達) [3a]

心の特殊性である悲愍などは、更なる努力に依存しない。即ち、ひとたび心に生じて作用すると、それは、人為的な努力などの他の外的要因に依存することなく、それ自身にて連続して作用する。そのことから、修習により生じた、心の特性たる悲愍は、任運に作用する。しかも、悲愍は心の特性であるから、心を拠り所とする、即ち、心の相続を安定した拠り所とする。こうした「安定所依の有」と「更なる努力への非依存」なる二条件を伴った心の特性としての悲愍は、心の自性 (svabhāva) となり任運に作用する。⁽¹⁴⁾ その様に任運に作用する場合でも、更に続いて悲愍の思いに努めることは、悲愍のより高まる特殊な状態を作り上げる。つまり、後続の悲愍を究極まで至らしめる。⁽¹⁵⁾

この論証では、「悲愍は心の特性である」という論証因での「特性」には、上記の二条件からなる限定が付されている。即ち、悲愍は、「安定所依を有し、更なる努力に依存しない」心の特性である。この様に「心の特性」なる論証因は、特定な限定を有するので、悲愍が人の本性となること、つまり、増長の極みに至ることを確実に導く、それ故に、不定論証因ではない、⁽¹⁶⁾ と Dev は論破する。この論証を参考にすることにより、先述の問い、即ち、悲愍が人の本性となることを確実に導くために、「心の特性」なる論証因に付した「修習にて特殊となる」という条件は何か、という問いに対しては、心の特性に付加された上記の二条件、「安定所依の有、更なる努力への非依存」という二条件である、と答えることができるのである。

以上、Dev による「悲愍は、修習にて人の本性となり、増長の究極に

達する」という説の論証を一瞥した。悲愍は、心の特性、しかも、修習により、上記の二条件、「心相続なる安定所依を有し、更なる努力に依存しない」という条件を伴う特性である。それ故に、悲愍は、人の本性となる。そのことから、悲愍は増長の究極に達する、と論じるのである。本論にては、悲愍の増長説を論理的な視点から説明したが、悲愍が実際にどのような因果の過程を通して増長するのか、また、上記の Dev の基本的見解 ([1]) での「悲愍が退滅しないこと」は如何にして証明されるのか、という点については別稿にて論じる予定である。

(本稿は、文部科学省研究補助 (基礎研究 C) の研究成果の一部である)

略号 (略号については岩田 2006 の略号参照)

岩田 2006 岩田 孝「プラジュニャーカラグプタの悲愍修習論 (1)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52 (2006年度) 45-57.

註

- (1) See PVV 9, 16 (ad PV II 7a: tadvat pramāṇaṃ bhagavān): yathābhihitasya satyacatuṣṭayasyāviśaṃvādanāt, tasyaiva parair ajñātasya prakāśanāc ca. 稲見正浩「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究」(3)『島根県立国際短期大学紀要』1 (1994) 17に和訳。
- (2) See PV II 34ab': sādhanam karuṇābhyāsāt sā (「[世尊の量性を] 能証する要因は悲愍である。その[悲愍]は、修習による」), 岩田 2006, n. 5. 仏教論理学派での悲愍の定義については、稲見 1997, 17, n. 4, 岩田 2002, I.1 参照。
- (3) See PVT(Ś) 108a8 (=D 89a1): **mthar phyin pa** ni 'phel ba'i mthar phyin pa'o //.
- (4) PVP 18a4f.: ṇan soṇ la sogs par 'gro ba (P; bar D 16a6) gags byed pa med pa de'i tshe goms par byas śiṇ de ltar yaṇ daṇ yaṇ goms par byas pa de'i bdag ṇid du gyur pa'i thugs rje gaṇ yin pa de 'dra ba mthar phyin pa ldog pa med par 'gyur ro //. PVP 18a3-6 は、稲見 1997, 18, n. 6 に和訳。
- (5) PVP 18a4 (= D 16a6): śi nes kyaṇ sṇon goms par byas pa'i dbaṇ gis 'jug par 'dod pa daṇ de'i bsaṃ pa daṇ lhan cig ldan par 'gyur te / (ad PV II 34).

- (6) See PVP 18a6 = PV I 221ab. 稲見 1997, 19, n. 6 に訳出。
- (7) 法称の悲愍の修習説 (PV II 120-131ab) については、稲見 1986, 137ff., 木村 1981, 111-117, 木村 1998, 218-221, 生井 1996, 296-299, nn. 126-127, 129 等参照。
- (8) See PVP 58b1-3 (= D 51b5f., ad PV II 120): sbyor ba ni yid kyi yon tan gañ yin pa de dag ni śin tu (D; du P) goms pa yod na / skyes bu śin tu de'i bdag ñid du 'gyur ba (P; gyur pa D) thob par 'gyur te / dper na gtsaṅ (P; gcaṅ D) sbra can thod pa can du gyur pa na yid 'byuñ ba med pa lta bu'o // sñiñ rje chen po (pos P D) ji skad du bśad pa'i mtshan ñid can yañ yid kyi yon tan yin no źes bya ba ni rañ bźin gyi gtan tshigs so // (「論式は〔以下の如くである〕。心の特性 (manoguna) であるものは、十全に修習される (*atyantābhyāsa) と人の究極的本性に至る (*atyanta-sātmibhāvaṃ prayānti)。例えば、〔カーパーリカの道に入った〕バラモンの場合のカーパーリカの残酷さ (*nairghṛṇya) 〔は心の特性であり、以前からの習慣により生じてその者の本性となる〕如し。そして、既述の如き特相を有した大悲愍 (mahākaruṇā) は、心の特性である。〔それ故に、十全修習にて人の究極的な本性に至る。〕こうした〔論証での「心の特性たること」なる論証因〕は自性論証因 (svabhāvaheṭu) である。」。稲見 1986, 140 に訳される。梵語 sātmibhāva が de'i bdag ñid du 'gyur ba と西蔵訳されるので (see PVBh 108, 1 = PVBh(Tib) 119a7), śin tu de'i bdag ñid du 'gyur ba の梵語としては、*atyantasātmibhāva の如きが想定されよう。Alexis Sanderson 教授からの私信によると、カーパーリカは、その実践道においては、無恥であり (nirlajja) 残酷である (nirghṛṇa) ことを徳目と見なしている。従って、この論式での「残酷さ」は人の本性となるべき徳目の例となる。カーパーリカに関する貴重なコメントを提供下さった同教授に感謝の意を表します。
- (9) PVP 58b3-5 (= D 51b6f., ad PV II 120) : gañ dañ gañ yid kyi yon tan goms pa las khyad par can du 'gyur ba de ni rim bźin du śin tu (D; du P) goms pa las skyes bu de'i bdag ñid du 'gyur te / dper na gtsaṅ sbra (P; sbras D) spyod pa thod pa can de ñid yid 'byuñ ba med pa lta bu'o // skyes bu rnams kyi sñiñ rje chen po yañ goms pa las khyad par can du 'gyur ro źes bya ba ni rañ bźin gyi gtan tshigs so //. この論証因「心の特性であること」により、智慧なる心的作用が殊勝の極み (prakarsaparyanta) に至り得る、という論証式は、TSP (1077, 20-22) にも見られる (see Iwata (compassion) n. 50)。

- (10) See PVSVT 400, 10f.: (**śrotriyakāpālikaghrṇāvad** iti) yaḥ śrotriyaḥ san kāpāliko bhavati, tasya śrotriyāvasthāyām yā ghrṇā, sā yathā yatnam antareṇa na śakyate nivartayitum (tadvat) (「バラモンであるがカーパーリカとなっている者のバラモンであったときの嫌悪は、努力なしには滅除され得ない如く」), PVT(Ś) Je 298a6f.
- (11) PVP では、定説者にとって、本性となること、つまり、自性 (svabhāva) となることは、努力に依らずに任運に作用することであると換言されている (PVP 60a3f. (ad PV II 125 ab), 本論の注14参照)。See also PVP 59a7f. (ad PV II 123): śnar 'byuñ ba de'i **khyad par 'phel** ba yin na' **an** (viśeṣasya ... vṛddhāv api)/ cuñ žig tsam 'phel ba yin na (D 52b1; gyi P) yañ **rañ bžin min phyir** (asvabhāvatvāt) te de ñid rañ gi ñaṅ gis 'jug pa med pa ñid kyī phyir ... (「以前に生じたその特殊性〔例えば、人の跳躍という特殊性〕は、増長するが、〔つまり〕僅かは (*kiṃcinmātra) 増長するが、自性ではない故に、〔つまり〕その〔特殊性〕そのものは任運に作用しない故に、〔その様な特殊性も更なる努力によって成立するものである〕」)。
- (12) See PVS 111, 1f.: na hi svabhāvo 'yatnena vinivartayitum śakyāḥ, śrotriyakāpālikaghrṇāvat.
- (13) PVP 60a5-7 (ad PV II 125): (sbyor ba ni) gañ žig brtan (D 53a3; bstan P) pa'i rten can gyi chos yin pa dañ / gañ (P; gañ la D) ji lta ba bžin du skyes pa yañ 'bad rtsol la ltos (D; bltos P) pa med pa ni goms pa las śin tu mthar thug par 'gro ba yin te / dper na śiñ la sogs pa la tshos pa las skyes pa'i gzugs la sogs pa lta bu'o // skyes bu rnams kyī sñiñ rje chen po śin tu goms pa yod pa can yañ brtan pa'i rten can yin pa dañ / khyad par skyes pa (P; pa la D 53a5) yañ 'bad rtsol la ltos (D; bltos P) pa med par yod pa yin (P; bžin D) no žes bya ba ni rañ bžin gyi gtan tshigs so //. 西藏語訳 śin tu mthar thug pa の梵文としては、*atyantaniṣṭhā (?) の如きが想定されよう。プラジュニャーカラグプタによる同類の論証については、岩田 2006 での PV Bh 106, 11-14 の和訳、及び、その解説を参照。因みに、木の燃焼の実例の他には、例えば、金を精錬する場合に、金の純化状態なる特性が究極に至ることなども実例となる (TS 3420-3422ab, TSP 1079, 19-22 参照)。
- (14) See PVP 60a2-4 (ad PV II 125): gañ gi phyir brtse ba la sogs pa goms pa las skyes śiñ 'byuñ ba'i (P; ba D 53a2) yon tan yañ sbyor ba la ltos (D; bltos P) pa can ma yin pa dañ / rten brtan (D; bstan P) pa can yin pa **de'i phyir de'i rnams skyes yon tan de ni rañ bžin ñid du 'gyur** te / 'bad rtsol

la ltos (D; bltos P) pa med par rañ (D; pa rañ rañ P) gi ñañ (D; rañ P)
gis 'jug pa (de'i tshe yañ /) (「修習より生じ〔更に続いて〕生じる〔心の〕
特性である悲愍などは、更なる〔人為的な〕加行に依存せず、安定した抛り
所を有する。それ故に、それら〔の人々〕に生じたその特性は〔心の〕自性
(svabhāva) となる、即ち、努力に依存することなしに任運に作用する」)。

- (15) See PVP 60a4f. (ad PV II 125): ... de'i tshe yañ /... 'bad rtsol sña ma sña
ma las **'bad rtsol phyi ma phyi ma'i** sbyor ba gañ yin pa de ni / **khyad par**
phyi ma phyi ma mthar phyin pa'i bar du **byed pa yin** (P; ma yin D 53a3)
no // (「その〔悲愍の任運作用の〕場合でも、それぞれ先行する努力より後
に後続する努力を実践することは、それぞれ後続する特殊な状態を究極にま
で至らせる」)。

- (16) See PVP 60a7f. (ad PV II 125): de ltar khyad par dañ bcas pa (*sa-
viśeṣaṇa) ñid yin pa'i phyir gtan tshigs ma ñes pa (anaikāntika) ma (P;
om. D 53a3) yin no //.